

# 成蹊會誌

第六號

## 成蹊の現在と將來

成蹊中學校 校長 鈴木一郎

成蹊も戦後變つたと云われるが教育目標が新たに定められ、學制が變つた以上、以前の舊制高等學校のときと同じような状態である筈がない。校舎はそのまゝであつても、それを容れる學生生徒の状態が變つてゐる。現在では小學校、中學校、高等學校と政治經濟學部を主體とする新制大學とが設置されてゐる。高等學校について云えば名前は従前通りであるが性格が全然違つてゐる。元のように大學豫科の性格がなくなつて、全國に幾百とある高等學校の一つであつて、従来のような特權をもつてゐない。したがつて高等學校を卒業して東京大學などの大學に入學する場合には全國から集まつた多數のものとともに激甚な入學試験を受けてこれを突破しなくてはならない。以前も舊制高等學校を卒業して東京大學などは皆入學試験を受けてはならなかつた譯で、しかも受験する各高等學校の卒業生は過去において劇げしい入學試験を受けて難關を通つたものであるから、入數は少くても事情は同じように思えるが、現在のような事情は甚だやりにくくしかも入學と云ふことに危険性が多

すぎる。それは一面學校の性格から來てゐることであると同時に生徒の傾向にも關係がある。旧制高等學校の當時でも尋常科を修了して高等科に進む場合に、その當時競争が劇げしかつた官立高等學校に進んだとした場合、どのような入學成績を示したか、やつて見たわけでないからわからないか或は意外の結果を生じたのではないかと想像される。入學試験は資格試験でもなく、入學試験でもなく、物で云うならば、物全體の評価でなくて、その物の或一つの斷面を評價して、合否を決定してゐるから、テストされる斷面だけがよく出來上つてゐる場合には、物全體が如何に粗悪でも合格品になるわけである。勿論試験する側でも物全體がわかるように斷面を工夫するであらうが、過去においても、現在においても、試験方法は餘り變つてゐないから、この方法では理想的な選抜は先づ不可能と思われ。現在では進學適性検査が一種の資格試験のように取扱はれてゐるが、この試験内容には多大の疑問がある。生活態度が誠實で、學校成績のよい者が不幸にして選に入らぬような場合が可成り多く起る。高等學校側から

云つて面白くない。成蹊は今から四十年前中村春二氏の教育主張に基づいて開設され、堅固な品性と教養をもつ人物の育成を目標として、所謂人格教育を行うことを基本方針として現在に及んでゐる。その間、時代の變遷、制度の改革などを經、戦後新憲法の下に教育基本法が制定され、次いで學制改革など、目まぐるしい變化は起つたが學園の根本方針とするところは、人間教育の根本に横わる本質の陶冶にあるから、これらの變遷を超えて常に教育の根本義として現在なお傳統として存續してゐるのである。吾々はあくまでこの傳統を守つて教育をしてゐるのであつて、たゞ入學試験だけに間に合う人間を養成してゐるのではない。

經濟多難なこの状態において義務教育の年限を延長して教育に力を注いでゐるのも、國家的に云えば、民族の繁榮のため、眞の民主主義國家として作り上げて行くために、より高い程度の教育を必要としたからに他ならない。個人的立場で云えば、教育は社會生活のため、人間生活のために缺くことのできないことであるが、根本的には人間の陶冶、人間のよさの獲得にあるのであつて、余はその人の能力によつて、その人仕事に従事して行けばよいのである。人間は誰れも自己の幸福をねがわないものではなく、親として子の將來の幸福の基盤をどうして作つてやるかに心を砕くのである。したがつて親は自分の望んでゐる大學を卒業して社會人となるに及んで、先づ親の責任が果されたと云ふ安心感を覺えるのである。しかし人間は頭腦と云わず、個性と云わず、身體と云はず、その發達の状態は一樣でない。みなそれぞれに運速がある。學校生活の終つたときに發達が止まつてしまふと云ふことにきまつてゐるならば問題はなくなるが、實際には學校生活の間にも、またそれを終えてからも目まぐるしい變化をするものがある。事實において學園十三年の間に小學校時代とは全く變つた状態になつて卒業して行つた多くのものをわれわれは記憶に止めてゐるのである。人間はすべての段階において最善をつくすべきであるが、人生行路のうちには周圍の環境、状態によつて時につまづき、時に緩むことが起る。こゝから正常の發達が疏止され、發達に遲速が起ることになるのである。このとき出來たマイナスは短か期間にとりかえし得ない致命的なものになることもあり。素質はありながら入學試験に間に合う斷面を構成し得ない原因となるのである。またこれと反對に學校生活が順調に行つても、首尾よく目指す大學に入學し得たとしても、その時期を限りとして頭腦に疲勞が來て弾力を欠き、その源泉が涸れた状態が引き起されるならば、目指した大學への入學は反つて不幸の原因となるであらう。人間の能力にはそれぞれ程度の異なる境界がある。この境界を超えて行動することによつて不幸の種が播かれるのである。出身學校の如何によつて人間の運命、不幸がきまるわけではない。しかし學校生活のうちには作り上げられた人間性の陶冶如何は、入學試験にも入社試験にも、採り入れられる工夫が充分されてゐるようであるが、人間の一生を通じての運命に關係する、人間性のよさはその素質を補つてなお餘りあるものがある。

成蹊の現在は旧制時代と違つて、色々の原因が重なつて、漸次學級數を増して、小學校は各學年三學級編

成、中學校、高等學校は各學年五學級編成である(高等學校三年だけが現在三學級になつてゐる。來年度はら全部五學級編成になる)。入數は總計二〇〇〇名を超える。したがつて必然過去に於ての小人數による個人教育の行き方にいさゝか支障がある。しかし一般の公私立に比べて考へれば遜色があるわけではない。本學園の小學校で入學するものも、中學校で入學するものも、みな大學教育を受ける志望をもつてゐる點から教科面においても一貫性を確立し、義務教育の線はずし、教科内容を整理統合して、各學校間に連絡移讓して、十二年間の教育に徒らな繁雜、重複を起さず、内容上他においては實現しえない程度にまで進める考である。戦後學制改革ともなされた教育上の具體的な種々の欠陥があらわれつつある。この中には既に一般に改めるべき結論のでてゐるものもあるが、本學園においてはこれらを始め、其他にも缺陷と思はれる點は法規の許す範圍において改善を斷行してゐる。

高等學校の卒業生の志望は旧制當時と同じく東京大學志望が壓倒的である。卒業後の志望は自由になつてゐるが、成蹊大學の進學については便宜を供與してゐる。何分當大學は政治經濟學部一つであるために、將來の志望上、好むと好まざるにかかわらず、他の大學を志望しなければならぬものも多數あることから考へて止むをえない結果でもある。若しこゝに理科系統の學部(工學部がよい)開設されるならば、その多くの部分を吸収入學させることができて、小學校から大學までの眞の一貫する教育を實現することが出來、成蹊の教育の使命を完たからしめることができるのである。

學制改革によつて新制大學が續々と開設された。新制大學の性格は開設當時それぞれの大學で論議されたが現在ではいづれも漠としたものになつてしまつてゐる。従前の東京大學の行き方にその内容、方法を近づけようとする努力だけが拂われてゐるやうに見える。悪るく云へば東京大學の出店であることを目指していることでは結構なことであるが、こゝで云おうとするのは大學そのものの性格目的のことである。新制大學は旧制大學の缺陷を是正して、深く人間性の根源に根ざす豊かな教養と、廣く視野の下に立つ知性とを育成しつゝ、兼ねて専門教育、職能教育を施すことをもつて、目的としているのであるから、一般教養の成果如何が中心の問題となるわけである。成蹊大學は制度的に云へば過去の七年制高等學校が基礎となつて、その上に設置されたものであり、教育上の方針から云へば、成蹊教育の延長である。七年制高等學校の當時にも、この上に大學を設置すべきであると云

う考はあつたが、色々の都合で實現できなかった。たまたま學制改革に遭遇して、圖らずも實現することができたのであるから、かねての素志を大學教育において實現するようにならなければならないのである。戦後成蹊も經濟的に多難な路を歩いて來た。それにもかゝらず大學の開設、中學校舎の建設、小學校舎の増築等經濟上の困難を克服して實現したことは、學園に關係するものとして齊しく感謝にたえないところである。各方面から寄せられた厚意、協力に對しては教育内容を充實して、これに應える以外にはないことを決意し、着々具體的に方策をたて、進めている次第である。しかし成蹊教育の一貫性を確立するためには、經濟上、制度上なお幾つかの難問題を解決することが必要であつた。これらの解決には各方面の理解と協力がなくては出來ないことである。われわれは一日も速やかに解決のできることを期待して止まないのである。

追懷

永田龍之助

話は正六・七年の頃に遡る。凡そ三昔前の思出の記である。省線電車が二一三編成で十二三分おきに走つてゐた。東京驛の姿はそれでも新裝落成した今日のそれとは餘り變化はなかつた。代々木の驛が赤土の膚をあらはに、立體交叉の工事を始めた許りで中央線の電車は二輛連結の中野止り十五分毎に運轉されてゐた。勿論、今の様に満員電車ではなく、偶々哲學堂や三寶寺の池、さては井の頭公

園など武蔵野の風物を樂む人達が利用する位のものであつた。中野からは汽車で二一三時間に一回位、見渡す限りのクヌギ林と其の間に點在する杉林の間を一直線に西に延びて走つてゐた。従つて、吉祥寺までの遠足は一日がかりで猶ほ相當忙しかつたと記憶する。省線(當時は院線と言つた)池袋驛の附近、線路の東側と西側にそれぞれ商店が、又その間に住宅が散在して、校門までつゞいてゐた。妙山

堂なる菓子屋が一軒店並をはづれた島の中に突立つていて、主として生徒相手に駄菓子を買つてゐた。目白驛との中間を武蔵野線の汽車が團體の割に長い煙突を振り立て、西に走つて、山手線の上を横切つてゐた。その交叉點に近く成蹊女學校があつて線路をへだて、富春園なる草花屋が相當廣大な地籍を占めて、四季と正六の花を咲かせてゐた。大正六年の眞夏の頃であつたと思ふ。物凄く暴風雨に見舞はれて、電車の架空線がスパークした眞夜中の暴風の猛威におびえたことがあつた。翌朝になつて女學校の校舎がコフレタたことが發見されて、吾々中學生が大層して引越しかつたら數時間にして略々元通りの雨天體操場が出来上つたのもほんとの話であつた。

校門の兩側にイテウの並木があつて、それが途切れる附近に三〇坪位の池が二一三本のエゴの木の下に横たわり小さな小川が流れ込んで居た。有名な成蹊池であつて、魚の棲家であると同時に生徒の修練道場の役をも果してゐた。池を見下す位置に木造二階建の青ペンキ塗りの本舎なる寄宿舎があり、二一三十名の悪童どもが收容されてゐた。丁度其頃大久保先生が神戸から赴任して來られて舎監としてその建物の二階の西南隅の一室に起居して居られた。オポロゲな話で恐れるが、本舎の舎監なる者は短い間によく替つた様に思ふ。關根某氏の如き、胸か足まで眞黒い剛毛で掩はれた豪傑で、通稱クマノと申上げてゐたが、二階の寢室の、シカモ近代的な寢舎を使用してゐたのにもかゝらず、起床の太鼓が鳴りひびいても一向に影も形もあらはさない先生であつた。毎朝のカケアシやら、掃除やらの行事は年若い我々には相當な苦行であつた

が、先生たる者がこの行事を逃れるために寢台の下にモグリ込んで居るつてゐる風景は、將に本末を顛倒した寄宿舎の成蹊らしい風景であつたと思ふ。略々時を同じくして久保田某先生がこの舎監室に同居して居られたことがある。本職は園藝の先生で、最近退職された三上先生と共に、鳥作の教授に當つて居られた。そして、其の風體が、ウワツパリのの上から薬繩の帯をしめ込み、鐵ブチの強度の近眼鏡を通して柔和な眼をかがやかし乍ら、先づ「肥桶に指を突込んで其の味を見よ」と申渡された先生であつた。言うだけでなく眞實に生徒の目の前で自から實踐しての命令であるだけに、逃げもかくれもならず事程左様に園藝がいやになつたのも事實であつた。學問の方は、兒玉五十先生を始め宮本純先生、宮坂請宗先生など、主として曹洞宗大學を卒業した方々を中心としてゐた。反對に内野台嶺の教授を本職とする成蹊にはモツタイナイ方々もあつた。數學の梅地價三先生や内田サルカバ先生などは講義の相の手に登山熱や水泳熱をあほられる處に捨て難い興味があり學生の人氣を集めてゐた。其他、有名な無名の先生が相當數居つたのも眞實であるし、先生の素質のよしあしなどよりは、如何にして苦しい作業や癡念をサボるか、如何にして樂をして甘いのものを喰うかの方がより大きな關心事でもあつた。一番の苦手は十二月末日に行はれた三日間の斷食修業を初雪の日の池水練や、眞夏のワタイレ癡念であつたと思ふ。斷食その他一連の行事は困苦缺乏に堪える修業である。其他の行事の數々も主としてそれであるが、何は

サテ活動盛り、喰ひ盛りの中學四・五年生ともなれば(今の高校一・二年生相當)三日間の斷食には全く音をあげざるを得なかつたし、勢ひ近所の大根島が一夜の内に荒れ果て、生徒達はやうやく満した満腹感と大根は生でも案外イケル物であるとの體験に甘夢をムサボリ時分に、先生が百姓の苦情に平身低頭する悲喜劇が演ぜられる定石も生れたのであつた。寄宿舎に收容されてゐた生徒は概して善良なのは少なかつた。筆者が自ら其の一人であつたのであるが、これは郷里が遠方であつたからその仲間には入らないことは自明の理である。猫を二階から荒縄でプー下げて野球のバットでタタキ殺して喰つた者もいたし、靴の敷皮をカツレツにして舎監先生の食膳に供した悪童もあつたがその底皮をカタイクと言ひながら喰つてしまつた我慢強いクマノ先生の強剛さも相當なものであつた。最も苦手であつた一つは炊事當番中に野球か何かに夢中になつて台所を忘却した場合の跡始末であつた。何しろ靴の底皮や、猫のスキヤキを喰う先生、生徒の胃のフは一般では見られぬ強健なものであるだけに、食欲の旺盛さは敢て申すまでもない處。結果として、自分のサイフをばたいてパンなり何なり代替品を用意して其の胃を沈黙せしめる必要があつた。或る十二月の寒い夜の出來ごとだつたと思ふ。故、岩崎小彌太先生寄贈の丹頂鶴二羽が校庭の隅で開放を叫びながらカラ／＼とよく鳴いてゐた。鶏を盗む要領は、夜間にその眼前でマッチをすつて鶏が驚いてゐる間に有無を言はず抱きかゝるにあるとの説をなす者あり。然らば鶴の場合は如何と言へば、言下にいと易いことな

りと答えて言う。クチバシを握りしめて振り廻すにありと。理屈や議論は別としてそれから二・三日後には鶴の姿が見えなくなつた事と、夜のゾウスイに鳥の肉らしいものがあつた處から判断すると可愛い鶴も何時の間にかやら悪童どものエジキとなつたものとの判走も下される譯である。

生徒の修養の合圖は學園では鐘を用ひていた。従つて鐘にうらみのある連中が妙ならず、日と共に、年と共に怒々益々増加したこともうなづける。其處は生徒の淺はかさか、無邪氣さか、兎に角鐘さえ片づけてしまへばと考へた者が出たのも無理からぬ決論でもあつた。或る夏の日の晝の凝念が始つた時に何だか平素の様子と異つた氣持がした。鐘がならぬ物足りなさであつた。確か兒玉丸十先生であつたと思うが、拍手で合圖をして其の日の行事は兎に角終つた。この拍手を合圖にして何處からともなくクス／＼としのび笑が漏れていたのは仲間だけが知る満足感の表象であつた。二・三日後のこと近所の百姓さんが肥壺から發見したと言つて御丁寧にその鐘を學校に持込んで来たので事件は一應落着いたものゝ、洗い清められた其の鐘が現在に迄持ちつゞけられているそのものか否かは保證の限りでない。

書き續けると止ともなく古い温櫃が新に浮んで来る。吉祥寺の校庭に幸にして戰災をまぬがれた中村園長先生の温顔が偲ばれる。そして「桃杏物言はざれども人自ら蹊をなす」とささされた先生の信念と、教育に對する理念は今日なほ新に傳承されている。單に成蹊學園のみのはこりではないと思う。學問や勉強には其の頃餘り熱心でなかつた私共の先輩や級友も、何時の間にかやら夫々激烈な生存競争の場裡に於ての覇者として

の業績をつみ重ねつゝある事實がそれを裏書している。

東大の南原總長が本夏北海道視察の旅に出て歸京しての第一聲は中村崇君(中村先生御次男で苦小牧製紙名古屋工場山林部長)が居なくて淋しかつたよ。と言うのでめつた。其後新築なつた懷徳館(一名迎賓館)と稱して、東大が前田公爵家から寄贈をうけた唯一の日本建築)で村上藤太君(旧姓尾寺)等を交えて崇君の轉勤を祝つたことがあつたが、其の南原先生が古く本郷時代(成蹊學園發祥の地)の成蹊園の塾生であつたことが其時始めて明らかにされた。等置しず子の後援會長と傳えられる時の人南原さんが、矢張り吾々成蹊學園のゆかりある人ときいて、中村先生の教育理念が数多い東大の教職員や學生をも通じて更に傳承されて行く力強い姿が思はれて、喜びを禁じ得なかつた。

往年の悪童共も、今日では社會の中堅人物として隨所で活動している様は上述の様で洵に心強い限りである。吾々の次の時代は更に飛躍的な活動部面が見られやう。それは、中村園長先生が其の昔、學園教育は大學教育まで一貫せねば達しられないと言はれた處からも容易に判断出来る。現に、戦後出發した成蹊大學も早くも來春には初めての卒業生を出す運びとなつたが、若い人達を迎える社會では大手を擡げて其の卒業を期待していることが立證していると思ふ。同窓會の活動は尙ほ未だ不充分ではあるが、更に新鋭を加えることに依つて其の結束が愈々固く、永遠の生命となつて世の指導的指針となることを希望してやまない。

(東京大學農學部教授、中學五回卒)

☆ ☆ ☆

### 成 蹊 會 地 方 支 部

#### 仙 台 支 部

最近、各地で成蹊會支部發足の話があり、當地でもこの春から心がけて居りましたが、十月六日、今村邸で約二〇名がスキヤキを圍み谷岡幹事の御來仙をねがつて、仙台支部の發足をいたしました。支部長は千葉明画伯、副支部長は三井生喜雄教授が、會員全員の希望をいれて、お引うけ下さいました。

秋田、福島その他東北各地に御住の方々と連絡が、仲々とれまさんので、一應、仙台支部として出發して、ゆくゆくは東北地方全體がまとまればと、希つて居ります。

在仙の會員の集りは、今までも年に二回位もよほして來ましたが、大學關係の會員の多い當地は、新陳代謝が甚しく、お互の顔を見るのも大變で、殊に大學外の方々と連絡は、思うにまかせませんでした。今回、支部發足とともに、廣く在仙會員が集ひ、千葉支部長を中心として、和氣藹々たる成蹊の雰圍氣をかますことの出来るのは誠に楽しいことです。

村田、三井兩教授の御活躍の大學で、若い連中は、よく遊ぶよく學んで居ります。先年は、在籍僅か十三人で、野球のインターハイに優勝しました。またまりの良さを示した、輝ける戦歴です。

新制大學になるにつれて、新しく來られる會員は減るかも知れませんが、心力歌をバックボーンとした我々の集りを、仙台に、いつまでも續けたいものです。

なお、東北各地の會員の方々より、御連絡を、紙上をおかりして、お願いいたします。

仙合支部連絡先 (仙台市片平丁東北大學工學部應用理學研究室、三井生喜雄方)

仙合支部幹事 金谷 太郎

#### 關 西 支 部

發起人會から創立總會を経て發足致しました關西支部も爰に一年を送り第三回の會合を旭化成の小幡副支部長の肝煎りで十月十二日夜大阪驛前平岡旅館で開催致しました。

折しも關西地方御視察中の鈴木高等學校長を來賓に迎へ本部から丹羽會長、谷岡幹事京都成蹊會から川路、岩田兩幹事の参加を得て總勢三十有二名が一堂に會するを得ました事は支部發展途上に於ける一大慶事として厚き御協力に感謝の意を表す處であります。

此日丹羽會長から東京に於ける學校法人としての學園の方針、經營等の詳細なる御説明を煩はし一同居ながらにして東京の様子を手に取る如く知る事を得又鈴木校長先生は視察に來て成蹊學園は決して他の學校に負けては居らぬという確信を強めたという心強い視察談を發表せられ皆々難有く且つうれしく存じましたが此上とも御奮闘を戴く様懇願する次第であります。

京都成蹊會幹事の出席せられたのは爾來京都成蹊會は京大在籍の成蹊出身者の會合で後から京大に進學し

來る學生の下宿の世話を始め面倒を見る事もやり且つ京都諸先輩及學生の團結を堅ためて來つたもの、當今では地域的關係及學園に大學が出來た事等から、京都に學生の來る事は減る一方と考えられ又毎年卒業の都度轉出するので京都成蹊會を此際關西支部の學生部として抱括の希望案を提げて來られたので早速協議の上全會一致で此提案を可決致しました。

次に幹事は一年制に付改選を行い左記の通り新任選出致しました。

- 支 部 長 平生 太郎
- 副 支 部 長 廣澤 俊夫
- 幹 事 松本 良祐
- 同 佐々木 隆
- 同 (神戸地區)
- 同 黒田交三郎
- 同 (京都地區)
- 同 川路 俊三
- 學生部幹事 岩 田 整
- 同 吉町五三
- 同 平生太郎方(電話御影二二四〇)
- 學生部 連絡所は京都市上京區紫野御所田町一田島様氣付川路俊三方

尙會費が寄らないので本部も支部も會計は困つて居るといふ事に關し學生幹事は是が集金係を引受け川路岩田兩君が取立に向う事になりましたから御含みの上万事宜敷く願上ます。

第三回の會合當日の大略を右に御報告と一部御願の筋を書かせて戴きました。

關西支部副支部長 廣澤俊夫

#### 關 西 支 部 學 生 部

東京を、朝九時の「つばめ」でたつと、夕方の五時頃に京都に着く。こゝは古い文化の都で、山紫水明の地であるなどと今更申すに及ばず、